意味の國際教育は必要である。眞の國民教育、よき日本人の教育はかゝるものを排するものではなく、進めるものである。從來の教育の中に虛僞によつて敵愾心をあふり立てる事が多かつたならば、それは勿論改善しなければならぬ。

六從來の教育の中に各國ともかゝる分子の存在して居つたことは吾人の認むる所である。深作博士の意もそれの排除の意味であらう。この點に國際教育の思潮も顧慮すべきは固よりである。玆に吾人はウイリアムスの『社會的科學の基礎』(一九二一年)の中の國際教育論をも顧みやう。

自發的に熱烈な愛國心を起すには同類的たるを要する。國民的功名心も亦國民性を高揚する。これ戰時に見る所であつて、平時に於ても對外的感情はそれを強める。併しながら、狂信的行動は軍隊主義に導き、階級心に導く。それ故國内に於ても國際關係に於ても合理的な協同精神が要る。然るに從來は國民の偉大といふことが國民性の中心で、同情的でも、合理的でもなかつた。かくして現今の米化運動には二つの對立

する傾向がある。一は開國當時のやうな經濟的機會の自由を回復しやうとするもの、一は現在の經濟關係を維持すること卽ち有產階級の社會支配である。外人に英語を教へることゝするものは後者に屬する。前者は實業の民本化で、それには國民全部の知性と同情との發達を要し、又創造的衝動を刺戟し、修練するために一般教育が必要である。

然るに教育に於ては傳習的教科に固執し、教法は衒學的であり、教師は固定的になり、生徒の作業から判斷すべきを自己の態度から計量する。教育はそれらを改善すると共に大人にも與へられねばならぬ。今後の國民性の陶冶は進步的公民の教育でなければならぬ。黨派的、宗派的、階級的、國民的競爭のものであつてはならぬ。それらは自由なる知性の發達を害する。公民教育の中心事實は思考であつて、思考は外的束縛及び衝動からの自由がなくては不可能である。この廣義の自由てふことが國家の目的たる人格の發達の中心である。

七右の所論中に見る主知主義、自由主義は教育及方針の全部たるべからざるものではあるが、在來の教育に改善すべき點の存在を主張した點は傾聽すべきである。

ウイリアムスはなほ階級の打破には完全なる教育によるの外なしといひ從來の公民教育は上流の支配を認める國民的感情の教育で、ケルシエンシユタイナーはそれを示すものとしてデユキーに左袒して居るが、吾人より見ればケルシエンシユタイナーの公民教育も決して階級的のものでなく、むしろ正當なる民本的のものと思ふ。民本的に主張した多くの部分を認めるのである。ウイリアムスが國際協同（經濟的）を力說し、盲目的愛國心でなく、合理的なるべきことの主張は理想として固より取るべきである。

ウイリアムはデユキーと同じく主知的、合理的方面を中心とするが故に、理想的、急激的なる點はたしかにある。これが彼のケルシエンシユタイナーに與しない點であるが、右いふ如くケルシエンシユタイナーは英米の階級自由主義に學ぶべきことは以

前の公民教育論にも述べて居り、最近の著書の中には現在の學校が凡ての公民の子弟を結合せず、國民の相違、宗派の相違のみでなく、階級のために分割されて居ることを批難し、又學校が他人を助けることを教へずそれを壓迫する動向をすゝめることにつき攻擊して居るのである。たゞこれが解決のために同じく協同を主張するが、デユキー、ウイリアムは知性のみを力說し、ケルシエンシユタイナーは協同に慣らす習慣を主張して居るのである。なほ一層大なる相違點の存在は、一は國際主義に出立して國家主義を第二次的、傾向として見、他は國家主義から國際的協同を說く點である。

八ケルシエンシユタイナーは前述の協同精神の教養方法として次の如き革新案を唱へて國際教育との關係をも指摘してゐる。

學校は個人的功名心の場所でなく、社會的貢獻の場所となし、理論的、知的偏頗から、實際的、人間的多樣に變じ、知識の正しき獲得の場所から、正しき使用の場所に變化させる。かゝる變化は單に公民教育に道を開くのみでなく、公民を超えて人間、

人間的本質を眼中におくものである。何となれば、人間一般は個々の公民と同じく人間のために人間と共にする作業によつて可能であるからである。正しき世界公民にまでの道は常に正しき公民にも導く。何となれば正しき世界公民は美的宇宙主義者でなく、書物の上の人類狂信者でなくて必ずや人類の幸福のために從事する人であるから。公民の義務を忘れて、人類につくす如き人は、婦人解放運動のために、子女と家政とを無視する主婦と、毫も選ぶところがない。

國家發展の催進が正しき家庭生活に於ける意味は、人類の進歩が正しき國家生活に於る意義と全く同じ關係である。地上に於けるあらゆる理性的生存者の最高社會としての人類は、その發達のために個々の國家家族の內的組織及び分業を必要とすること、恰も國家がその發達のために家庭及びその他の團體を必要とするのと全く同じい。單に混沌たる Menschheitsvrei は何等の發展をもなし得ないものである。

九 ケルシエンシュタイナーはこの事に於て何處までも愛他心の敎養を力說して居

る。國際方面をも無視しない。國民に於ける愛他心一般の敎養はやがて人類のすべてに向つての愛他心である。スラブ民族の國民的感情はその基礎に於て利己主義的であるが、ドイツ民族の國家感情は社會的動向が基礎だといふ彼の立言は多少差引して聽かねばならぬが、正しき國家感情は愛他的のものたることは許さるべきである。盲目的、鎖國的愛國心でなく、眞正なる愛國心、國民的道德、國家的思想に意を致さねばならぬ。

猶太主義、自由主義のコーエンすらも、國民のイデーの實現が理想主義の任務の凡てゞあるといつたことを想はねばならぬ。

彼に於て人類の理想が固より根本である。しかし、それは、國家の理想に於て、實現し得るものである。國民性の理想の此の意味を發展したのがフイヒテの不朽の功績であるといつて居る意義を味はねばならぬ。

コーエンは、國民が國民的敎養及び敎育の力に賴ることをいひ、國民統一の統一學

校を主張したのであるが、國民主義と國際主義との衝突は外觀上の矛盾に過ぎないことを力說し、人類を尊敬する限り國民を尊敬すべきことを主張し、祖國の概念の必要を說いて居る。美的世界主義者、急激的國際主義者に反省を與へるものである。

彼にとつて祖國の概念は、「古來あらゆる實際の力と自然の衝動とをして最高の道義的努力と結び合つて成長し愛の情緒とならしめて居るもの」である。この意味の理想化せる國民概念、祖國の概念は一の文化概念であつて、その中に道義性も含まれて居る。この道義性は國民のあらゆる成員に就いて精神の統一に於てのみ喚起せられ敎へられる。かくて社會の理想は精神文化の根底の上に國民の眞の統一を作り出し、この最高の目的即ち國民理想の實現が理想主義の任務の凡てゞあるといふのである。

勿論この意味の國民理想は排他的、利己的、鎖國的のものではない。いはゞ道德的、愛他的、文化的のものである。吾人の意味する國家的敎育もこれに外ならない。偏頗、偏狹のものではない。この意味に於て國家的思想を涵養し、國民的理想を發揮

することに努めねばならぬ。國際敎育の思潮が狹隘なる國家主義を警戒する意義は十分これを認めるものである。

十以上吾人は國際敎育の思潮を右の意味に於て眺め、その極端なる見方でなく、國際的國家主義とでもいふ形に於て是認すべきことを述べたつもりである。吾人は飽くまで、理想は現實から少しづゝ、一歩づゝ實現して行くべきことを力說して筆を擱く。(十一、一、五)

昭和二年八月三十日印刷
昭和二年九月五日發行

文化中心新教授學大系
第一卷 新教授法原論
定價 壹圓五拾錢

著者 入澤宗壽
發行兼印刷者 東京市麹町區富士見町五の九 辻本經藏
印刷所 東京市本郷區駒込千駄木町一三六 明立印刷株式會社

發行所 東京市麹町區富士見町五の九
振替口座東京五八一八〇番・電話九段七二七番
教育研究會

(大津製本)

K 199

文化中心 新教授學大系

本大系の監修者

東京高等師範學校教授　佐々木秀一先生
東京帝國大學助教授　入澤宗壽先生
奈良女子高師教授　石澤吉麿先生

◇本大系全十五卷の著者——

第一卷　新教授法原論……入澤宗壽著
第二卷　修身新教授法……野村芳兵衛著
第三卷　國語新教授法(上)……峯地光重著
第四卷　國語新教授法(下)……峯地光重著
第五卷　算術新教授法……水木梢著
第六卷　地理新教授法……菊地勝之助著
第七卷　國史新教授法……志垣寛著
第八卷　綴方新教授法……峯地光重著
第九卷　理科新教授法……水木梢著
第十卷　家事新教授法……石澤吉麿著
第十一卷　體操新教授法……山崎博著
第十二卷　唱歌新教授法……小出浩平著
第十三卷　圖畫手工新教授法……稲森縫之助著
第十四卷　各科教授學習精義……田花爲雄著
第十五卷　文化教育學と文化科教授法……入澤宗壽著

259
5
99